

禅の友

—Zen no Tomo—

7

July 2022





ご本山だより
大本山永平寺【如浄禅師正當】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



その朝、道元禅師はいつものように坐禅をされていました。場所は中国・浙江省、禅宗五山の第三位に列されていた天童山景德寺。二十四歳の時に船で海を渡られたその旅は、今の時代で言えばまるでロケットに乗って月へ行こうかという様な過酷なものでしょう。しかしひとたび仏門に入り真実の仏法を求めた若き修行僧の足は、導かれるように天童山住持・如浄禅師の下へと辿り着きました。そして坐禅の中、道元禅師はついに悟りの境地に至ります。自分の命、命のあるこの世界、そして世界のあるこの宇宙の大きな働きを感じたのです。

後に道元禅師は「明らかにする」という言葉でお示しになります。頭で考え理屈を導き出すのではなく、この世界と一体化して「縁起」によって結び

つくこの世の在り様を明らかに感じられたのです。それはまさしく、今から約二五〇〇年前に涅槃に入られたお釈迦さまより正しく伝わった法であり、永い時を経てお釈迦さまより如浄禅師へ、そして如浄禅師より道元禅師へと受け継がれた瞬間でした。

日本へと戻られ永平寺を開かれてからおよそ八〇〇年もの間、この正伝の燈は脈々と伝え続けられています。決して途切れることなく、お釈迦さまより数えて第八十八代目となる、黙室玄照禅師・永平八十世南澤道人不老閣下へと繋がるのです。

ご本山に親しむ私たちにとって、如浄禅師はまさに報恩の祖師の一人となります。七月十七日は如浄禅師のご命日。ご供養の日でもあり、感謝の日でもあります。



ご本山だより 大本山總持寺【孟蘭盆会】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



瞬く間に半年が終わり總持寺では孟蘭盆会の時節となりました。コロナ禍での行持の中止や延期、そして縮小と何とも言えないもどかしさが続いております。

例年、七月一日より十日までの施食会法要は感染状況を考慮しながら行われます。

また横浜鶴見を代表する夏の風物詩として定着し、地元と總持寺を繋ぐ大切な行持である「み霊祭り納涼盆踊り大会」は止むなく中止とさせていただきます。

尚、一昨年よりの「お盆の墓経」は今年も行う予定でありますので、希望される檀信徒の皆さまにはご足労ではあります。が總持寺まで来ていただき、ご先祖さまをご供養申し上げることにさせていただきます。

未だ終息がみられないコロナ禍の中でも私たちは先祖や家族、また親しき友への思いは忘れてはいけませんし、その感謝報恩のためにも良き教えを学び実践するように心がけることが大切なのです。

俳人の村上悦子さんが掲載誌『雨月』の中で「僧の声に声を重ねて孟蘭盆会」と詠まれています。檀家の方が菩提寺（代々その寺の宗旨に帰依して、先祖のお墓があり、また位牌を納めてある寺）へ墓経に来て、お坊さんが読経している後ろで一緒になって読まれている光景なのであります。う。その方も亡き方々への感謝報恩のご供養のためにそれが形となって表れている姿なのであります。孟蘭盆会は亡き方々と接する機会であり生き方を学ぶ大切な行持なのです。

選・坊城俊樹

埴輪たちの出自は火星目借時^{めかりどき}

島根県 藤江 堯

評

「目借時」は蛙が鳴くころになると目を蛙に取られて眠くなるという謂れから来た。幻想季題だがこの埴輪たちの存在もまた幻想的。なるほどあの不思議な顔は火星から来たのか。こんな難しい季題を取り合わせるのとはこんな飛躍が必要だという好例かと思う。

たもとほる万太郎忌の夜の銀座

東京都 友野 瞳

評

小説家の久保田万太郎の忌日は五月六日。彼は俳句もやり、それは人情や都会の風景を詠む句が多かった。東京の人である彼は銀座にもよく出没しただろう。それを思い、その足跡を辿って作った句。立夏の足音とともに彼の影を慕い歩く作者の姿か。

◆ 牡丹の己が吐息に崩れけり^{ぼたん}

東京都 長谷川 瞳

◆ 花いかだ風棹させば御堂まで

神奈川県 堀田 耕一

◆ 暖かや楮の香るかな半紙

埼玉県 伊藤 博

◆ 春風やうさぎの耳のゆれてをり

静岡県 石濱 徹

◆ 老農は寡黙に生きて日脚伸び

山口県 藤野 祥子

◆ 雛流し京をめざすや平家雛

山口県 栗屋 邦夫

◆ 村と村つなぐ電線大青田

秋田県 小田嶋 恭葉

◆ 梧桐や磨き上げたる中華鍋

大阪府 柏原 才子

◆ 堂の静寂へ涅槃図の慟哭す

岐阜県 大下 雅子

◆ 店棚に誰を見詰むるや桜鯛

鳥取県 眞山 博充

選者吟

もののふの五輪塔とは春の土

俊 樹

作句小見

この句の「もののふ」とは東京の興福寺にある稲毛氏の墓のこと。数百年は経ち、墓標としての五輪塔はただの土の柱にしか見えなくなっている。栄枯盛衰の見本のような歴史の墓。今は暖かな春の土となって、おそらくは春の夢でも見ているのだろう。

選・長澤 ちづ

諸葛菜の花を撓ませ熊ん蜂が蜜を吸ひを
りここは平和だ

茨城県 田口 昭子

【評】中国の三国時代の武将、諸葛孔明に因む名を持つ諸葛菜や、蜂の中でも大きく強い熊ん蜂を一首に登場させ、結句の平和につなぎ巧みな一首。ロシア侵攻に拠るウクライナ情勢を踏まえた上での「ここは」であることも推し測れる。

教室に暗幕張りて原爆の落とし子「ゴジラ」を我らは観てみた

三重県 西村 廣視

【評】「ゴジラ」は一九五四年製作の特撮映画。「人間が生みだした恐怖の象徴」としての「原爆の落とし子」ゴジラと再認識することで、核の恐ろしさを考えようとする。

◆ 影となり日向となりて去る君の足音まさに時のごとしも 静岡県 土屋 きみ江

◆ 最終の便で帰宅の靴音が深夜の路地に連なり響く 鳥取県 山本 浩一

◆ 演習の名のもと戦地に送られて母の名を呼ぶロシア兵哀れ 福島県 大槻 弘

◆ 我が家より見ゆる風土記の残存湖蜆採る舟日がな浮かびぬ 秋田県 小田嶋 恭葉

◆ 気圧配置くづるるさざし海境を増毛連山白く顫ちたり 北海道 菅原 三江子

◆ 海底でありし地いまは山となり貝殻白き切土断面 静岡県 小川 健治

◆ 土も無き岩のさけめに生き延びて春を待ちいる小さき草の芽 鳥取県 徳本 義則

◆ 今の世の何と戦う芝桜這いつくばって這いつくばって 福岡県 三吉 誠

◆ カレンダーを渡り鳥たちお持ちかなコンピュータを持っていきますよ ロサンゼルス 井上 健一

◆ 裁ち鉄紬台針山指貫と何れも母の方便の仲間 鳥根県 横山 豪吾

選者詠

晩年の母編みくれしセーターがときどき肌に
ちくちくとせり

ちづ

【作歌小見】

土屋さんの「足音」は現実の音ではないような気がします。一〇二歳という御歳を考えると何か計り知れない深いものを捉えて居られるような。井上さんの一首から想うことは人間よりも優れたものを持っている生きものたちの存在です。